

文学作品を活用した自己表現力を高める授業づくり ～「語り」の活動を通して～

地主 尚子

弘前大学教育学部附属小学校

【キーワード】 自己表現力 相手意識 語り手 聞き手 語り

1 はじめに

今、国語力の育成がクローズアップされている。中央教育審議会の答申¹⁾の「イ 学習指導要領の見直し」の中には、次のような記述がある。

国語は全ての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。
(下線は引用者)

これは、国語はあらゆる学習の「基幹教科」としての役割を担っているということを意味する。それでは、「基幹教科」として国語学習が子どもたちに育成していくべき学力とは、一体どのような力なのだろうか。現行の学習指導要領では国語科の目標で、

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。
(下線は引用者)

と「伝え合う力」が付け加えられた。「伝え合う力」とは、『学習指導要領解説 国語編²⁾』に示しているように、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に理解したり表現したりする力」である。つまり、言葉で仲間と関わり合う、言葉で仲間と伝え合う力が、国語学習で育成していくべき「基幹学力」なのである。言葉で仲間と関わり合う、言葉で仲間と伝え合う力を育てるためには、「自己表現力」を育てることが大事であると考ええる。

本学級の平成18年度学力実態調査(NRT)の国語科〈話す・聞くこと〉の領域の結果を見ると、「大事なことを聞き取ること」「話題に沿って話し合うこと」についての理解が不十分であることが分かった。また、同じ調査の〈読むこと〉では、「内容を考えながら音読すること」にも課題があることが分かった。この結果より、本学級の児童は「仲間との関わり合いを大切にしながら、聴き合ったり、自分の思いを伝えたりする力」が十分ではない、ということが言える。

そこで本実践では、

- ①自分の読みや思いを声に出して友だちに伝える表現活動
- ②互いの読みの違いを聞き合う活動
- ③友だち同士で読みについて説明し、練り合い高め合う交流活動

以上、3つの活動を取り入れた「語り」を単元に位置づけ、自己表現力を育成し、課題の克服に努めたい。

1) 中央教育審議会の答申『新しい時代の義務教育を創造する』2005年 p15

2) 文部省『学習指導要領解説 国語編』1999年 p8

2 研究仮説の設定

子どもたちの「読むこと」「話すこと・聞くこと」の実態に基づき、自己表現力を高めるための課題を把握し、「読み」と「表現」を関連づけた語りを中心に捉えた授業づくりの在り方を探るために、以下の仮説を設定し授業実践を行う。

文章の叙述から読み取った人物の心情や場面の様子をもとに、相手意識をもたせた音声言語表現（語り）を学習活動の柱として展開していくことで、子どもたちの自己表現力を高めることができる。

3 研究方法

本実践の仮説検証にあたり、次の2つの手だてをとる。

(1) 自分の考えを文章化する「読み」の活動

この活動では、人物の気持ちや様子がわかる叙述にサイドラインを引き、自分の意見・感想・登場人物の心のつぶやきなどを書き込ませる。この書き込みをもとに、それぞれ自分の「語り」を創っていく。書き込みは、学級全体での読みの交流や、「語り」で友だちからもらったアドバイスを参考に、何度も手直しを重ねていく。

(2) 語り手と聞き手が一体となって創り出す「表現」活動

全体での読みの交流をおこなった後、ペア（もしくはトリオ）で語りの交流をさせる。その際、聞き手には、自分の読みと比べながら聞くように指示する。アドバイスの時間では、二瓶弘之氏の実践「語りの四つの観点」³⁾を参考にして作成した「語りの五つの観点」を意識させながらアドバイスさせる。

- ①視 線…聞き手に目を向け話す。「目」で自分の読みを表現する。
- ②表 情…顔の表情で場面の様子や人物の気持ちを表現する。
- ③速 さ…語りの速さと間（ま）の取り方の工夫する。
- ④声 量…場面の様子や人物の気持ちに応じて、声の大きさを工夫する。
- ⑤視点人物…その文が、誰の目になって語られているかを意識しながら語る。

※五つ目の観点は
検証授業Ⅱから
つけ加えて子どもに提示。

資料1 文学作品の「語り」五つの観点

4 仮説検証授業

4. 1 検証授業Ⅰ「白いぼうし」

対象児童：弘前大学教育学部附属小学校 3年1組 39名

実施期間：平成18年7月

◆本時の指導（9／14）

- ①学習材 「白いぼうし」（光村図書4年・上）
- ②目 標 四の場面の松井さんの心情を「語り」によって表現することができる。
- ③展 開（略 案）

主 な 学 習 活 動	学習指導上の留意点
1. 松井さんの心情を読む。 ○ペアおよび全体対話	◇心情を表す言葉だけでなく、情景描写や行動描写にも気づかせる。
2. 四の場面を「語り」で表現し合う。 ○ペアおよび全体で語りでの交流	◇語りの「四つの観点」をもとにしたアドバイスをさせる。
3. 一人語りをする。	◇仲間との交流によって新たに読み取ったことを「語り」に生かすよう指示する。

3) 二瓶弘之『“夢”の国語教室創造記』（2006 東洋館出版社）pp66-68

【検証授業Ⅰの考察】

以下の授業記録は、全体での語りの交流での記録の一部である。

- C₁ ぼくは「女の子がいなくなって不思議に思っている気持ち」と、小さな野原の所では、きっと蝶たちが松井さんの親切を嬉しく思っていて喜んでいて、それが「あたたかい」感じを出していると思うので、そういったことが伝わるように語ります。聞いてください。
- T では、感想やアドバイスはありませんか。
- C₂ 声の大きさはよかったんだけど、目線に気をつけた方がいいです。
- C₃ 会話が上手だと思った。不思議だなあと思ってる感じがよく出ていたと思う。
- C₄ 「松井さんはあわてました」のところが本当にあわてているんだよって、分かるように急いでというか、速く読めばいい。だってここでは、女の子がいきなりなくなったんだし、車が動いてるのに出ていくなんてありえない。だから、すごく松井さんは驚いているはず。
- C₅ あっ、そっかあ。じゃあ、やっぱり女の子は蝶なのかも。
- C₆ 「あたたかい」感じができるように、って言ってたけれど、ぼくは、最後の一文「車の中にはまだ夏みかんのにおいが残っています。」の所も、そういうように読めばいいと思う。だって、夏みかんには松井さんのお母さんの気持ちがこもっているから。ただ、ただね、表情でも見せないとわからないよ。

子どもたちは、友だちの話したことを受けて話し合っていた。また、話し手の表情にも注目した発言が見られた。これらは、「語り」の授業実践に取り組む前では見られなかったことである。しかし、授業を重ねていくうちに、次の二つの問題点が出てきた。

- ①一生懸命に表現しようという様子が見られるのに、語り方が一本調子の子が多い。

特に、地の文と会話文の読み方に違いが感じられない。

- ②子どもたちの書き込みに「新たな読み」があまり書き込まれていない。

課題としては、「語り」を通して自己表現力を高めるさせるためには、理解を深めるための読みの交流の仕方に、もっと工夫した指導が必要であると考えた。

4. 2 検証授業Ⅱ「スーホの白い馬」

対象児童：弘前大学教育学部附属小学校 3年1組 39名

実施期間：平成18年12月

検証授業Ⅱでは、アドバイスをもらう側の姿勢を改善していくことにした。アドバイスをもらったら、自分の語りをどのように変えていくのか考え直す。また、アドバイスをもらってもよく理解できない場合は、何度も相手に質問をする。納得するまで質問をする。この二点を意識させながら「アドバイス」の学習活動に取り組ませることにした。

◆本時の指導（3／5）

- ①学習材 「スーホの白い馬」（光村図書2年・下）

- ②目 標 二の場面を「視点人物」を意識した「語り」で表現し合うことができる。

- ③展 開（略 案）

主 な 学 習 活 動	学習指導上の留意点
1. 視点人物を確認する。	◇語り手が「スーホの目になって」語っている文、「スーホの耳になって」語っている文、また、語り手が「外から見て」語っている文を確かめる。
2. 二の場面を「語り」で表現し合う。 ○ペアおよび全体で語りでの交流	◇「五つの観点」をもとにアドバイスさせる。
3. 一人読み	◇仲間との交流によって生まれた「新たな読み」の書き込みをする。
4. 二の場面を各自の「語り」で表現する。	◇「新たな読み」を生かす語りを指示する。

【検証授業Ⅱの考察】

以下の授業記録は、ペア対話（アドバイス）での記録の一部である。

- C₁ 今、語りを聞いて思ったんだけど、「兄弟に言うように話しかけました」と言う部分を強く読んだよね。それはどうしてなの。
- C₂ ここで、二人の心がつながったとぼくは考えて、だから、その気持ちを強く読むことで表現したかったというか…。
- C₁ ぼくは、ここは仲良しだよ、という感じで読んでいたんだけど、そんな考えもあるんだ。その考え、もらってもいいかな。あとさ、「はっと目をさました」の所なんだけど、先生が言っていたように、表情でも気持ちを表現した方がいいから、もっと驚くような表情とか、「はっ」と「と」の間に「間（ま）」を少しでいいから空けた方がいいかも。

子どもたちは意識しながら互いの読みを比べて話し合っている。比べて読むことにより、同じ叙述でも人によって意味の捉え方が違ったり、それによって語り方に違いがあることに子どもたちは気づいた。その違いに「新たな読み」を創り出す楽しさ感じたようで、積極的に自分の思いや考えを友だちに伝え、また友だちからの意見を聞こうという意欲が強く感じられるようになった。また、仲間との読みの交流の回を重ねることで、ことばにこだわって読む子どもが増えた。対話するためには自分の意見をもたなくてはならないという目的意識や必要観が、ことばにこだわる子どもを育てていったと考える。

ことばにこだわるようになると、「語り」の学習活動にも変化がみられた。聞き手からは、「この叙述の中心人物の気持ちは、嬉しくてたまらないはずだから、もっと表情でその喜びを出した方がいいし、声も高くして語った方がいいと思う。」といったアドバイスが出るようになった。また、語り手は、その意見をただ受け入れるのではなく、「いや、自分はここを嬉しく思っているだけでなく、ほっと安心した、という気持ちも込めたかったから、少し声を弱めて読んだのだ。」と、自分の考えをどんどん言えるようになってきたのである。これは、「語りが上手になりたい」「自分の語りを聞いて欲しい」という思いが、文章を詳細に読み取る必然性を生み、互いの考えを深める話し合いにつながったものと考ええる。

以上のことから、理解力を育成していく中で、自己表現力は相乗的に高まっていくことが検証された。

5 研究の成果と今後の課題

本研究における成果は、表現することで、子どもたちが、一人一人が考えている読みの違いをはっきりさせていったということである。違いがはっきりすればすれほど、他の人の読みが気になってくる。友だちはどう考えたのか。自分の考えはこれでよかったのか。その結果、「自分の語りをみんなに聞いてもらいたい」という思いがことばに対するこだわりを生むと同時に理解力を育て、自己表現力の高まりを相乗的に生み出していったと考える。

課題は、客観的な評価の基準が立てにくい、ということである。音声言語の場合、音声ゆえに、発せられた言葉が、すぐそのそばから消えていくため記録としてほとんど残らない。授業者と学習者が評価規準を共有し、授業後に学習者に自己評価させていくことが必要と考える。

【参考文献】

- 八戸市小学校国語教育研究会『研究紀要No.32』（平成8年）pp31-32
- 全国国語授業研究会『読解力を高める』（2005 東洋館出版）